

博士(甲)論文審査及び最終試験結果報告書

2022年6月2日

人間環境科学研究科教授会 殿

論文審査及び最終試験委員

主査 庄山 茂子

副査 小崎 智昭

副査 太田 雅

副査 安所内 創

論文審査及び最終試験の結果を下記のとおり報告します。

記

専攻及び課程	学籍番号	氏 名
人間環境科学研究科 環境科学領域	20人博後001	原 やよい
審 査 論 文 題 目	病院の寝具の色に対し精神科入院患者が抱く印象	
論文審査及び 最終試験結果	(合) 否	
審査基準項目別の審査結果		
番号	審査基準項目	評価※
1	学術上の創意工夫・新規性	可
2	得られたデータの取扱いの適切さ	可
3	先行研究の取扱いの適切さ	可
4	論旨の明確性・一貫性	可
5	表現・表記法の適切さ	可
6	構成の体系性	可
(※ 各項目の評価は、可・不可の2段階で行う)		
博士論文提出資格取得日	2021年 10月 6日	
博士後期課程退学日	年 月 日	

論文審査及び最終試験結果の要旨

本申請論文は、一般病床より在院日数が長い精神病床の患者のストレス軽減に向け、最も患者の目に触れ、患者が直接使用する寝具の色に着目し患者に最適な寝具の色を明らかにすることを目的とした研究である。

まず、全国の病院で使用されている寝具の実態を明らかにすることを目的に、393の臨床研修病院を対象に調査を実施し、162病院から回答を得た。使用されている寝具は、清潔感を重視して主に白や無地が採用されていること、患者をリラックスさせるために一部色物や柄物が採用されていることを明らかにした。また、3割の病院が、「寝具の色」は患者にとって重要な要素と考えていることを示した。しかし、調査は、看護部統括責任者を対象にしていることから、実際に患者を対象にした調査が必要であると考察した。

そこで、異なる寝具の色に対し、精神科入院患者が抱く印象にどのような違いがみられるのか明らかにすることを目的に、精神科入院患者64名を対象に夏季に調査を実施した。白とペールトーンの5色（赤、黄、緑、青、紫）の異なる6色の寝具の画像を提示し、病室にふさわしい寝具の色、ふさわしくない寝具の色と6サンプルに対する印象を調査した。その結果、病室にふさわしい寝具の色は白、ふさわしくない色は、うすい黄が最も多いことを示した。また、うすい青の寝具に対し、気分の暗い患者の方が気分の明るい患者より「安心できる寝具」と評価したことを示した。因子分析の結果、「心理的快適性」、「機能的快適性」、「派手さ」の3因子を抽出し、「心理的快適性」の因子では、うすい青、白、うすい緑の平均因子得点がうすい黄より有意に高いことを示した。うすい青、白、うすい緑は精神科病院で用いる寝具として推奨できることを明らかにした。しかし、調査時期が夏季であり、涼を求めて寒色系が選択された可能性が考えられ、冬季に同様の調査を実施し検証する必要性を考察した。

夏季の調査に続いて、入院患者が求める寝具の色に季節による差異がみられるか明らかにするために冬季に同様の調査を行い、夏季の結果と比較した。病室にふさわしい寝具の色は白、ふさわしくない寝具の色はうすい黄が最も多く、夏季と同様であることを示した。うすい赤は、夏季と冬季ともに男女によって印象評価に違いがみられ、女性入院患者に好まれ、男性入院患者には好まれない傾向があることを示した。夏季と冬季の印象を合わせて因子分析を行い、「心理的快適性」、「機能的快適性」の2因子を抽出した。「心理的快適性」の因子では、夏季、冬季ともに、うすい青、白、うすい緑の平均因子得点が他の色より有意に高いことを明らかにした。病室にふさわしい寝具の色、ふさわしくない寝具の色、「心理的快適性」が高い寝具の色には、季節による差異はみられず、うすい青、白、うすい緑は病院で用いる寝具として推奨できることを示した。特に、うすい青が選択された理由として、色彩の選択において、自分の感情に一致する色を求め、青から連想される「暗い」イメージと患者自身の「暗い」感情が合致した可能性を考察した。また、寝具の色に白が選択されたのは、白のイメージである「清潔感」や慣用色として長く衛生用品に用いられてきたことが背景にあると考察した。

同一の限られた環境下で精神科入院患者を対象に色彩の印象を調査した先行研究はみられないことから、本研究は貴重なデータを得ると同時に、今後の寝具の色の選択に対し知見を深める結果を導いている。今後は患者の心理面だけでなく生理反応についても調査し、様々な視点から色の効果を検証することを期待したい。病室における寝具の色の重要性を指摘したことは、極めて意義深い。以上により、本論文は博士（人間環境科学）の学位授与に十分に値する。